

いつまでも、母さんといっしょだよ

一 虐殺

昭和二十年八月九日、ソ連軍の突然の不法侵攻は、あつという間に、私の住んでい
る承德にも及んだため、私たち承德在留の日本人も避難することとなった。そして、
母は、八歳だった私と、妹の和子、節子の三人を連れて、貨物列車に乗り避難行動が
続いた。

ところが、列車は止まったり、動いたりを繰り返しながら、なかなか先へは進まず、
大人たちは、ソ連軍が追いついてくるのではないかと心配していた。その間、雨に打
たれ夜は冷たい風が吹きつけるし、また、晴天が数日続くと、真夏の昼間の強い日差

しによって、日射病で倒れる人が続出した。亡くなる人の数も増えてきた。

ある日、突然列車が止まり、中国人の貨物列車の運転手がやってきて、

「さあ、全員降りろ」

と言う。ほとんどの人が河原へ歩いて行った。しばらくすると、トラックが二、三十台走ってきて河原に止まった。そこから降りてきたのは、初めて見るソ連兵だった。

突然、ソ連兵が飛び降りて来て、私たちを並ばせて点呼をとり始めた。そして、私たちに向かって、

「河原の水際に沿って一列に並ぶように！」

と言い、隣の人との間隔を五メートルずつあけるように片手を大きく上げて示した。皆は言われるとおりに並んだが、両端は、遥かに向こうまで広がっていて、見通すことができない。

ソ連兵は拡声器を持ち出して、訳の分からないことを怒鳴っていた。

そのうちにソ連兵から、「全員川に入るように！」と命令された。一斉に川に向か

つて進むと、大人の腰のあたりの深さになった所で、

「生まれ！」

と号令がかかった。

そして、親子も別々に離れて立つようにと、身振りで指示していた。一段と大きな声を出して叫んでいるソ連兵がいたので振り返ると、一人のソ連兵が母に向かって「子供の手を放せ！」というようなことを、身振り手振りで怒鳴っていた。

私はびっくりして、かえって反射的に母の手を強くつかんで母の顔を見上げてしまった。その母は口を半開きにしたまま遠くの空を見つめ、右手で私をしっかりとつかみ、左手には七歳の和子の手を握っていた。背中のリュックサックの上には節子だったが、そのままの状態です十分以上も立っていた。

突然、上流の方で銃声が響いた。しばらくして、再び数発の銃声したが、誰一人動く者はなく、しかも声を出す者もいなかった。母は、

「ソ連兵の弾なんか当たっても痛くないから、じっとしていなさいよ」

と、小声で言った。

黄色に染ま^そっている川の水が、ひときわ色を濃^こくして私^{わたし}たちの周りを囲むように流れていた。川の向こう岸には中国人がいて、こちらの様子を見ているのが、とても遠くのことのように見えた。

そのうちに、血が油のように波紋^{はもん}を作りながら、近づいてきた。一緒に流れてきた死体^{わたし}が、私の肩^{かた}に引^ひつかかったので、私^{わたし}が体を動かしたのを見た母は、握^{にぎ}っている手に力を加えて、「静かにしていなさい！」というゼスチャーをした。そのうち、死体^{わたし}は、私のそばで半回転してからゆっくりと離^{はな}れていった。

黄色くにごっている川の水は、溶^とけた血で一面が赤く染^そまっていた。

「母さん！ どうしたの？ 何かあったの！」

と、和子が小声で聞いている。私^{わたし}はこの時点では、「もうだめだ！」とは思っていない。あったし、母のそばにいれば、大丈夫^{だいじょうぶ}と信じていたが、その後意識^{いしき}が徐々^{じょじょ}に薄^{うす}らいできて、

「しゃがむと死ぬよ！」

と言う、誰かの声を遠くで聞いたまま、気が遠くなつていった。

その後、私（わたし）が気がついたときは、片腕（かたうで）を強く引っぱられて水の中であえいでいた。

周りでは、泣きわめいている人の声だけが聞こえていた。何回も水の中でもがいていたが、何とか自分の力で立って歩こうとしていた。一瞬（いつしゆん）、周りを見ると人、人、人の渦巻（うずま）きだけが目に入った。

その中には、泣き叫（ま）びながら流される子供（こども）、頭から流れ出す脳漿（のうしよう）を手で止めようとしている老人、それらをつき飛ばして前に進もうとする人、これこそ地獄絵図（じごくえず）というのであろうと思つたほどである。

また、ソ連兵の幾人（いくにん）かが先回りをして、逃げまどう人々（ひとびと）をねらいうちしたり、真正面（まへ）から銃剣（じゆけん）で突き刺（さ）したりしていた。深手（あば）を負つてもがいている人は、気が狂（くる）つたように叫（ま）びながら川の真（ま）ん中で暴（あば）れ回っていた。

※脳漿（のうしよう）……脳（のう）みそのこと。

私の前を逃げていく親子にソ連兵が追いつき、幼児の顔に向けて銃剣を突き出した。銃剣が幼児の頬の肉をそぎ取り、頬骨ですべった銃剣の先が、私の右手首をさつかすめた。三センチメートルぐらいの切り口が開き、肉が見えたが、どうしたわけか血は出ていないし、痛さを感じなかった。

母は、一時も早くここから離れようとして急いでいる様子だった。ふと、前を見ると、私たちの進んでいく数メートル前に、別のソ連兵がいて、逃げまどう親子連れの人三人を追っている。母は、そのソ連兵に気づかないようだったので、

「母さん！ こっち、こっち」
と言つて、私は力一杯、母の手を引っ張つた。

二人の顔の上に鳥が止まっているよ！

それからどのくらい経つたのか分からない。また、何も覚えていない。気がつくと、私と和子は裸のまま河原に座っていた。周りには、衣類やリュックサックに詰め込

んでいた物が散乱している。それらを水鳥が近づいて来ては、つついていて、母がそれを見ては石を投げて追い払った。母は干してある手ぬぐいを拾い上げ、引き裂いていた。その顔はいつもと違っていやに無表情だった。私も和子も何の感情もなく、ただ、ぼかんとして母の手元を見ているだけだった。

そのうちに母は私の右手をつかんで、手首の傷口をのぞいた。傷口は長さ約三センチメートルぐらいで、口は開き肉が見えているが、こんな深手なのに不思議なことに血は一滴も出ていなかった。母は、持っていた脱脂綿に赤チンキを含ませて傷口を消毒してくれたが、傷口までは届かなかったので、脱脂綿を絞って赤チンキをたらし込んだ。そのたびに、冷たさを感じたが、痛みはなかった。

顔を上げて川面の方を見ると、水面に夕陽が映り、きらきら輝いていた。

時間が経つに連れ、だんだんと頭の中も鮮明になってきて、銃剣で切られた前後のことや、突き刺した銃剣を引き抜くときの衣服の引き裂かれる音、刺された銃剣にしがみついて泣き叫んでいる母親の声などがよみがえってきた。

「そうだ！」

深手を負わされてもまだ死に切れずに、水しぶきを上げて暴れ回る子供のことが思
い出された。次いで、その周囲は真っ赤な血の波紋が、幾重にもうず巻いていたこと
が頭に浮かぶとともに、あの川の真ん中での場面が次々と思い出された。

夕日の映える川の向こう側では、何かが動いていた。砂煙が、あたかも野火がただ
ようように数百メートルにわたって巻き上がっていた。

「そうか、ソ連兵のトラックが引き上げていくところなのか！」

あそこの河原で、一列に並ばされて川の中に入れられた千人余りの人たちはどうし
たのだろうか。この対岸にたどり着いた人は、どんなに多くても五十人ぐらいしか見
当たらない。残りの人は川を渡りきれなかったのだろうか。恐らく九百人以上の人が、
この川の中で消えたんだ。

「満彦、さあ行こうか。和子も立ちなさい！」

と言う、母の力強い声に立ち上がったが、私は、

「だって、皆が来ないよ！」

と言り返した。母は再び強い口調で言った。

「満彦が歩き出さなければ、あの人たちは動かないんだよ！」

母の言うことが、私には理解できなかった。私は疲れていて動きたくない。それは、他の人より先に歩き出すのは、損をするような気がしたからであった。

だが、母の思いは別だった。肉親を失った人たちは、この場所から離れることは辛いことであろう。そんな中で幸いにも私の家族は、誰も欠けることなく全員助かったのだから、私たちが先に出発しないと、あとの人々は誰も腰を上げないだろうと母は考えたのだった。

その後、三十分ぐらい高粱畑の中を歩いていたが、皆はそこで立ち止まってしまった。それは辺りが暗くなり、歩く目標としていた遠くの山が見えなくなったからだ。また、遅れて歩く人もいたので、これ以上先に進むのは無理であった。大人たちは集

※高粱…53ページの注を参照。

まづ相談を始めたが、お互いに顔も知らない初めて会う者同士のために、話がまとまらなかつた。

遅れて歩いていたら人々が、ぼつぼつと私たちの所を通って行ったが、けがをしている人がほとんどで、歩く速さもまちまちだった。この時期は、陽が沈むと急に寒くなり、息を吐くと、口先に薄い水滴がすぐにできるようになる。また、気温が昼間は三十度ぐらいと暑くなるのに反して、夜ともなると零下七、八度に下がってしまう。結局、その夜はそこで野宿をすることに決まつた。

母はけがをしている人に近寄り、ぬれた服をぬがせた。そして、それを高梁の幹に掛けて手ぬぐいでその人の体をこすって、自分のリュックサックから乾いた下着を取り出し、話しかけながら着せていた。食べる物は何もなく、空腹で皆はぐったりしていた。

私はいつの間にか眠ってしまった、ふと目を開けると、高梁の葉からぬれる朝日がちらちらと揺れていた。母は私の横で座ったままで、周りで寝ている人たちをぼんやり

と見ている。私の横で寝ているおばさんは、大きなあくびをしていたが、それが治まると浅く小さな呼吸を繰り返しながら、動かなくなってしまう。私が頭を起こして母の腕をゆすつたら、

「疲れたんだって！」

ぼつりと一言小さな声で言った。疲れただけで死ぬなんて、そんなことがあるものかと、私は思いながら辺りを見回した。周囲で寝ている人たちは、皆やせこけて頬骨だけが目立って出ていた。しかし、どの顔にも、ほっとしたような安堵の様子がうき出ている、目をとじていた。たった数時間で、こんなにも人が変わってしまうのかと、子供心にも痛烈な印象を受けた。

「さあ！ 出発だ」

と、遠くの方で男の人の声がすると、あちこちで高梁の穂先が揺れだした。見渡すと、朝焼け雲の下をたくさんの鳥が飛び交っている。

※高梁…53ページの注を参照。

「母さん！ まだ寝ている人が沢山いるよ」

と、私は母を見上げて言ったが、母はそれには答えず、

「これからは、あそこにいるおじいさんの言うとおりにするのよ。班長さんだから」と言った。

半分ぐらいの人が、やっとの思いで重たい腰を上げて動きだした。私も和子も、母に遅れないように歩き始めたが、しばらく歩いていくうちに、私は置き去りにしてきた人たちのことが気になって、後ろを振り返った。

「母さん！ あの人はどうなるの？」

と、言ったら、

「疲れたから、しばらく休ませてくれて言っているの！ 満彦、もう振り返るんじゃないよ」

「でも、寝ている人の顔の上に鳥が止まっているよ！ 母さん、母さん！ 聞いているの？」

と、さらに母に問い詰めたが、それには返事がなかった。

三 ウジ虫の住み家

悲惨な行進が続いていた。一緒に歩いていた承子姉ちゃんの腕の傷口にウジ虫がわいてきた。

「いくわよ、もうすぐ終わるからね！ 我慢してよ」

と言う母の真剣な顔。口の両端が震えていた。

ピンセットでウジ虫をつまもうとするが、なかなかうまくとれない。承子姉ちゃん
の目からは涙がこぼれ落ちてきた。

「小田さん、もういいからほっておいてください」

と涙声で言っている。それを聞いた母は、しっかりと握っていた左手をゆるめた。これでやめるのかと思って母の顔を見ると、母はすました顔をして、左手を右手に握り替えて、

「ちよつと体の向きを変えて」

と言いながら、傷口きずぐちを下に向けると、傷口と反対側の腕うでのところを叩き始めた。

この時、意外な発見をした。腕うでを小刻みに振ふると、ウジ虫は、自分から出てくることが分かったのだ。

承子姉ちゃんは、ウジ虫が肉を食いちぎる時の痛みから解放かいほうされて、ほっとした顔になって、落ちているウジ虫を無表情むひょうじょうに見ていた。母は、

「よく頑張がんばったわね。もう大丈夫だいじょうぶだからね」

と言って、オキシドールで消毒をして手ぬぐいを半分に引き裂さいて、傷口きずぐちに当てて手当を終えた。

「一丁あがり！」

と言って、手を放した。承子姉ちゃんは、

「小田さん、ありがとうございます」

と、涙なみだを流しながらお礼を言ったが、その後で力ない言葉で、

「あの！ 母さんも、おばあちゃんも、妹の節ちゃんも、そして病気の父さんも！」
と言った。ただそれだけだったが、ずいぶんと辛い思いをしたのだろうと、私は思っ
た。

母はちよつと声を大きくして、

「承子さん、私が今いちばん心配しているのは、あなたのことよ。けがはここだけだ
ったの」

と言うと、

「足のところをちよつと」

と答えた。母が、承子姉ちゃんのもんぺを半分ずり下げたら、股のつけ根の部分が、
ざわざわと動いた。ここにもウジ虫がいた。二十センチメートル四方の膿の池の中に
数百匹と思われるウジ虫がうごめいていた。今度は、母の顔にも余裕があった。

「さっきのやり方で、もう一丁やるか。腹ばいになって右足を浮かせて」

と言って、前のやり方で叩き出したが、今度はうまくいかなかった。お尻を叩いても、

震動しんどうが傷口きずぐちに伝わらないのだった。そこで、母は、傷口きずぐちにオキシドールと赤チンキを半分なずつ流ながし込こんだ。承子姉ちゃんこしは腰こしをひねってウジ虫を一氣いに流し出でそうとしたが、母は承子姉ちゃんのお尻しりを押おさえて止めた。

「承子さん、今、傷口きずぐちの薬を捨ててしまうと、残ったウジ虫が中に入いってしまいますよ。しばらく薬の中で泳がせておきなさい。そのうちに自分から外に出でてきて落ちるからね」

と、少し乱暴らんぼうのようだったが、母にすればこうするより仕方がなかったのだろう。少し残った小瓶こびんの薬は、今後のために残しておかなければならなかった。

間もなく、承子姉ちゃんは痛いたみが薄うすれてきたのか、私わたしに向むかって話しかけてきた。

「こら彦っぺ。お姉ちゃんひみつの秘密ひみつを知しっただろう！」
と言いったので、

「いや、何にも見てないよ。そうだ足をちよっと見たけれど」
と返事へんじをした。

「姉ちゃんの言いたいことは、涙を流し、声を出して泣いたこと。おい彦っぺ、絶対に人には言うなよ。姉ちゃんの誇りが傷つくからな！」
と言うほど元気になっていた。

母は残り少なくなったオキシドールを脱脂綿に含ませると、高粱畑の中に転がってウジ虫だらけになっている人の口の周りや、傷口の周りをふいていた。暗くなった畑の中から、

「ほら、水だよ。いっぱい飲みなさい。ほら水だよ」

と言う、母の言葉だけが響いていた。水なんかどこにもないのに、母はそう言って励ましていた。

夜中に、承子姉ちゃんがうわごとで何か言ったので、私が頭を上げると、承子姉ちゃんははっとしたように気を取り戻して、

「彦っぺ、姉ちゃんは何か言っていたか？」

と言いながら、右手で私に何かを渡そうとしたので、私はその手を握ったが手の中に

は何もなかった。私はなんだか分からないままに、その手を胸元むねもとに戻もどした。それから
の私は、寝転ねころんだまま夜空を見ていた。月も星もきれいで静かな夜空だった。

しばらくすると、どこかで苦しそうな声がしたので、ふと目を覚ましたが、月の前
を素早すばやく横切る真っ黒な雲と、高梁畑コウリヤンばたけをざわざわと通り過ぎする強い風の音だけだった。
気がついて承子姉ちゃんの方を見たが、静かな寝息ねいきを立てていた。また、白い足と白
い腕うでが、月の光にはえていた。突然とつぜん、

「満彦！ 起きなさい」

と、母の声に飛び起きた。母は承子姉ちゃんのシャツをぬがせ、それを頭の上からか
ぶせてひもでしばっている。私はびっくりしたが、母は人差し指を口に当てて、

「このことは、和子には内緒ないしょだよ。あそこの草むらがいだらう。さあ足を持って」
と、私に言った。

「承子姉ちゃんは、さつき生きていたよ。話をしたもん！」

※高梁…53ページ注を参照。

と母に言ったが、母は聞いてはいなかった。

四 敏子おばさんの赤ちゃん

昭和二十一年の五月には、奉天（瀋陽）で避難生活を送っていた。

洗面器に砂を入れ、その真ん中に灰を入れて、その場で簡単な火鉢を作った。私は、七輪でおこし、妹の和子は、敏子おばさんが来たので、餅粟のご飯と味噌汁を作るのだと言つて、野菜を刻んでいた。母は、おばさんの汚れた着物を外で洗濯をしている。部屋の中は一本のろうそくでも、すみずみにまで光が行き渡り、とても明るかった。

敏子おばさんは毛布にくるまり、すり切れた畳の上で膝をかかえてじっとしていた。私は、いつものように三個の石を部屋の真ん中に置き、その上に火鉢を乗せて、何回かゆすつて座り具合を確かめた。母が洗濯物を持って戻ると、和子は七輪に乗せている鍋のふたを取つて、

「母さん、水加減はこれでいいの」と聞いた。

いつもより一人分多く炊くので、炊事係の和子は心配であったのだろう。母はちょっと鍋をのぞくと首を縦に振ったので、和子は直ぐにふたをした。白い湯気が鍋の上に残ったが、裏口の戸のすき間から入ってくる風で大きく揺れると、一瞬のうちに部屋の中にはおいしい餅粟の香りが満ちていた。

「あとは、母さんがするから」

と言うので、和子は火鉢のそばに座った。

私は母から受け取った洗濯物を広げると、おばさんと和子がその両端を持って、三人で火の上にかざした。三人とも、無言だった。その洗濯物は、濃い青色の地に白い小さな花模様^{はなもよう}が散らばっていたが、背中^{せなか}の部分はすり切れて穴^{あな}があいていた。それを見た私は、学校の裏のごみ焼却炉^{しょうきゃくろ}の横に埋めてきた敏子おばさんの赤ちゃんのことをふと思い出した。

その時の赤ちゃんの体は、着ている物でおおわれた部分は腐^{くさ}っていて膿^{うみ}でぬれていたが、空気に触^ふれていた顔はひからびて、目と鼻^{はな}が分からないほど皺^{しわ}だらけだった。

腐^{くさ}って抜^ぬけ落ちた下半身は、どこにいったか分からないというような状態^{じょうたい}であった。

「さあ！ ご飯^{ごはん}だよ」

私^{わたし}の思^{おも}いは、母の明^あるい声^{こゑ}で断^たち切^きられた。

母^{はは}が盛^もり付^つけると、和^わ子が風^{ふう}呂^{りょ}敷^{しき}を畳^{たたみ}の上に広^{ひろ}げて、漬^つけ物^{もの}とご飯^{ごはん}と味^{あじ}噌^{そう}汁^{じゆ}を並^{なら}べた。破^{やぶ}れた畳^{たたみ}表^{おもて}の下^{した}から、わらくずが飛^とび出^でして、風^{ふう}呂^{りょ}敷^{しき}の隅^{すみ}を持^もち上^あげていた。

「すまないね。道^{みち}子^こさん」

と、敏^と子^こおばさんがやつれた顔^{かほ}を一^{いっ}層^{そう}しわくちやにして、一言^{いちごん}口^{くち}を開^{ひら}いた。母^{はは}は私^{わたし}たちに向^{むか}かって、

「このおばさんは、昔^{むかし}、母^{はは}さんが奉^{ほう}天^{てん}にいた時^{とき}のお友^{とも}達^{たち}なんだよ」

と言^いって、微^ほ笑^えみを浮^うかべた優^{やさ}しげな顔^{かほ}でおばさんを見た。

食^く事^じをしなから、上^う手に話^わをする母^{はは}の誘^{さそ}いに乗^のって、おばさんも少^{すこ}しづつ元^{げん}氣^きを取^とり戻^{もど}してきた。うなずいたり笑^えみを浮^うかべたりしていたが、そのうち自分^{おのれ}からも楽^{らく}しかったこと、面^{おも}白^{しろ}かったことなどの思^{おも}い出^でを話^わし始^{はじ}めた。その話^わの大半^{たいてい}は、奉^{ほう}天^{てん}で零^{れい}

下三十度になったところの厳しい生活の話だった。

母がお湯を注ぐと、皆は茶碗を両手で抱えて熱い湯をすすり、久しぶりに楽しい夕食を過ごした。そして、こんな楽しい時間が、明日もその次の日もまたその次の日も、永遠に続くような和らいだ気持ちになっていた。食事の後も、四人でローソクの明かりを囲んで話し込んでいた。

「ところで子供は一人だったの？」

と、母が聞いた。

私が指先で丸めて火の中に落とした糸くずが、ちりちりと音を出して丸まった。おばさんは一瞬間を曇らしたが、直ぐに元に戻って、

「赤ん坊の真一の外に、三歳になった美代子と八歳の弓子の女の子二人がいたんです」「そう、敏子さんも苦勞したわね。差し支えなかったら話してくれない」

と、母は真剣な眼差しとやわらかい微笑みを見せておばさんに言った。

おばさんも心がほぐれたのか、考えながらぼつりぼつりと話し始めた。その目は空

間を見つめていたが、曇くもってはいなかった。

「暴民ぼうみんが手に手に鉦かねや竹やりを持って奇声きせいを上げながら私わたしたちに迫せまってきたの。暴民ぼうみんに殺されるぐらいならと自殺じくそを覚悟かくごしたの。……そしてね。人からもらったカミソリで美代子の喉のどを切ったの。美代子は私わたしの手から抜け出して走っていったのよ。そして、『お母さん！ いい子になるから痛いたくしないで』と遠くから泣いて叫さけんでいたの。ところが、暴民ぼうみんは目の前に迫せまっているし、早く何とかしなければと、氣ばかり急いでいたの。もう何もしないからと言って両手を出して近づこうとするけれど、美代子は逃げた。建物の陰かげから顔だけを出しては、『いい子になるから！ いい子になるから！』と言って泣いていた」

と、おばさんは嘔かみ締めしめるような言葉で話し始めた。

「そうしたら、美代子の近くにいた奥おくさんが、見かねて後ろからひもで首をしめてくれたんです。私は、『手をゆるめないで！』と、奥おくさんに叫さけびながら走って行って、美代子をしっかりと抱だきしめたの！」

と、おばさんは真剣しんけんになって話を続けていたが、急に顔を和やわらげると母の方をちらりと見て、すまなさそうな表情ひょうじょうを見せた。子供の私わたしたちに余分よぶんな話を聞かせてしまったという気持ちからだろう。

和子は目を見開いたまま、まばたきもせずに聞き入っていた。私も、それからどうなっていくのかと気になって、おばさんの次の言葉を待っていた。だが、母は話を變えてしまった。

「それで、弓子ちゃんの方はどうしたの？」

「暴民ぼうみんの数が多くなつてね！ 弾たまがピュンピュンと飛んでくるでしょう。逃げ場はげを失った私わたしたちは、暴民ぼうみんが来る前に皆みなで死のうと約束したの。その時、班長はんちやうが怖い顔をしてね。『頑張がんばるんだ！ 勝手な行動はするな！』ってね。だから皆みなで励はげましあったのよ。泣きながらね！ でもね、最後は班長はんちやうの合図あひだてで皆みなが自殺を急いだの。そしてね！」

と、おばさんはまた話を止めて、一息ついていた。

※暴民ぼうみん：暴動ぼうどう・反乱はんらんを起こした民。

「自殺ってどんなこと？」

和子は待ちきれずにおばさんに聞いた。

無煙炭の青白い炎の上に薄い煙が揺れていた。おばさんはちよつとためらいを見せ
た後に、和子の方に体を向けて、

「あのね、太い棒で頭を叩いてもらったのよ。皆が一列になって順番を待ってね」

「それで、弓子ちゃんは？」

母は、おばさんの話を打ち消すように、声を少し大きくして言った。

「あつ、そうそう弓子のことね？ 弓子は私がよく言つて聞かせると、『うん、うん』
とうなずいて、どうにもならない今の様子を、よくのみこんでいたみたいだったわ。
八歳だものね。母さんには、弓子を殺せないって言うのと、弓子は一人で、班長のいる
自殺場のほうに歩いていったの。あの子ったらバカみたいに手を振っていた……。」
おばさんの話は涙まじりで震え声になっていた。

火鉢にかざしていたおばさんの着物が全部乾いたので、母はそれをおばさんに渡し

ながら言った。

「今夜は遅いからもう寝よう。明日また話の続きを聞かせてね」

二枚しかない毛布に、皆でくるまって寝た。おばさんの痩せたひじが、私の手首の上に乗っていたので痛かった。

翌日、早く目が覚めたが、もうおばさんはそこにはいなかった。

「お墓に行っているのでしょうか。そのうちに戻ってくるよ」

母は、ぼつりと言った。

夕方、ローソクを囲んでだまつたままの夕食が済むと、そばにいた和子が、

「母さん！ 朝掃除をしていたらこんなものが落ちていたよ」

と言って、薄いガラスの破片のようなものを見せた。

母はローソクの炎にかざして見ていたが、和子に戻しながら、

「おばさんのものだよ」

※無煙炭：燃えるとき、ほとんど煙を出さない質の高い石炭。

と言った。

「どうして分かるの」

私は不思議に思つて聞いた。

「だって！ 赤ちゃんの爪でしよう」

ローソクの炎が揺れて、壁に映つた四人の影が大きくよろめいた。死んだ赤ん坊を背負つてやつと奉天にたどり着いた敏子おばさん、その着物のぬい目の中に爪がもぐり込んでいたのだろう。母さんがよく洗つたのに。

「きつと、死んでもお母さんの背中にしがみついていたんだね」

と私が言うと、和子も、

「兄ちゃんもそう思う？」

と答えた。

五 母との別れ

あれからもいろいろな苦労があつたが、何とか生きて日本に引き揚げて来た。それからの生活も並大抵なことではなかつたが、無事にシベリア抑留から帰還した父を迎えて生活再建を図つて、家族一同、力をあわせて努力した。

昭和五十五年十一月二十八日、入院していた母の容態が急変し、私は急いで病室に駆け付けた。母は私の様子を見て、

「何を慌てているの？ ドアの開け方がいつもと違うじゃないの」と、にっこり笑いながら言った。

「いや、何でもないけれど、朝のうちにと思つて」

「病院から連絡がいったのかい？ さつきちよつと気分が悪くなつただけだよ。もう大丈夫だから早く保育園に戻りなさい。子供や先生が待っているでしょう」

「彦っぺは母さんの子で本当によかつたよ。母さん！ 彦っぺを生んでくれて本当にありがとう」

と、今まで言いそびれていたことを心を込めて言った。

翌朝、私と節子とが付き添いの交代で顔をそろえたときに、母は二人に見守られて静かに死んでいった。享年六十九歳だった。

私は、母の手を握って、

「満州帰りがまだ二人生き残っているよ。これからも一生懸命生きるよ。母さんの子だもんな。」

と言った後、涙がとめどもなく流れていた。

（原作） 星野満彦 「日本に住んでいる瀋陽人」